

嵐の「穏やかさ」象徴、大野さんの言葉に活動休止を予感

有料会員限定記事

嵐、活動休止

文化くらし報道部・林るみ 2019年1月28日16時05分

嵐とは「世界中に嵐を巻き起こす」という意味で付けられた名だ。私は、1999年のデビュー時から嵐を取材してきた。10代の彼らを初めてインタビューしたとき、その名とは対極の穏やかな雰囲気が漂っていた。優等生的というか、おとなしく、品がよい。独特のピュアさを感じさせた。アラフォーになってもなお、当時のイメージを持ち味にしてきたように見える。

27日の「活動休止」を告げる記者会見で、彼らは「5人でないと嵐ではない」「1人でも欠けたら嵐でない」と繰り返した。デビュー時からたえず口にしてきた言葉だった。

「国民的アイドル」として、お茶の間で幅広く支持されてきた彼らは、世代でいえばバブル崩壊後のロストジェネレーション（失われた世代）、いわゆる「ロスジェネ」最年少に属する。この世代は、グローバル化、新自由主義が進むなかで、不安定雇用、格差社会にさらされ、「生きにくさ」を体感していた人々である。

嵐の人気に火がつき、文字どおり「国民的アイドル」になったのは、デビュー後7年ほどたってからだ。それはリーマン・ショックから東日本大震災へ、世の中の閉塞（へいそく）感が極まっていく時代と重なる。5年前、デビュー15周年を迎えた嵐を、雑誌「AERA」で取材したとき、5人全員が「自分たちの先のことはわからない」と口にした。「先が見えないからこそ、今を頑張るしかない」「自分たちがなぜ支持されているのかもわからない」「今の人気は夢ではないか」とも語っていた。冷静に自分たちを見ている。プロ意識が強く、仕事に懸命に向き合う姿は、不安定な社会で懸命に生きている人々の思いと共鳴し合うものがある。そう思うと、支持される理由がわかる気がした。

その取材で、リーダーの大野智が「嵐は（自分はもとより全員が）『俺が、俺が』というタイプじゃない」と語っていたのが記憶に残る。つつましさも嵐の特徴だった。ステージでは強烈なパワーを放つが、ぎらついたマッチョなおいとは無縁。誰にも我先に出ようという意識がなく、メンバー間の人気格差、凹凸がほとんどないバランスのよさも嵐というグループの特徴だった。

「平成」の最後の10年、不公平感が広がる社会で、「5人でなければ」と、嵐が築く対等な関係性と結束力は希少で理想的に映ったのではないか。

なかでもおっとりしている大野は、いざステージに立つと歌とダンスがうまく、嵐の「核」となる。一方、リーダーとしては威圧感がまったくなく頼りなげで、場を仕切るタイプではなかった。彼は嵐の「穏やかさ」の象徴的存在だった。

だが、5人は人気が出るのに比例してメディアへの露出がどんどん増え、ソロ活動も増え、スケジュールは厳しくなった。世間が彼らに「癒やし」を求めれば求めるほど、彼ら自身は疲れていくという、皮肉なことになったのかもしれない。

もちろん、彼らはアイドルを20年も務めているのだから、「そんな忙しさは宿命」と思っていたと思う。ただ大野は若いころから同時に何でもこなせるという器用なタイプではないと見受けられた。そもそも、嵐はデビューから人気が一気に出るまでは、ジャニーズのなかでは、珍しく、サブカルチャー的なフィールドで活躍し、「王道」ではない雰囲気似合っていたアイドルグループだった。とくに大野は趣味の絵画は玄人はだしで、嵐として見せるおっとりした表情とは別の、繊細なアーティスティックな感性ももつ。

5年前、大野に一番大事にしているものは何かをたずねると「趣味の時間、一人きりの時間」と答えている。「生まれ変われるならしたいこと」に「芸能界に入っていない自分が何をやっているのか、一度ぜひ見てみたい」とも語っていた。自分の性格を「頑固だ」と分析もしていた。今思えば、自分に何かをインプットしたいという思いが感じられ、活動休止の会見を予感させる発言だった。

ステージの構成を担当してきた松本潤も、その記者会見で「次に何をやろう、次何をやろうというのは大変だった」「自分もいい時期に（嵐を）しめることを考えたこともある」と語っている。実はデビュー以来、嵐のイベントやコンサートを見続けてきて、近年少々マンネリズムを感じた時期もあった。もうそろそろ彼らもアイドルを卒業する時期に来ているかと思ったこともある。

ところが昨年末に20周年のコンサートを見て、驚いた。その少し前、BTS（防弾少年団）のコンサートを見たとき観客の熱気と若い観客に圧倒されたのだが、嵐の会場はそれに負けない、いやそれ以上の熱気であった。完成度が高いステージに、若いときにはない、20年で培ってきた彼らのエンターテイナーとしての余裕と底力を見た。40代に向かうアイドル嵐、おもしろいことになってきたと思っていた矢先だった。まだまだ先を見てみたいと思っていた。

2020年末、嵐の活動休止によって、「ひとつの時代が終わる」と言う人もいる。

でも、その頃、日本はどうなっているのか。明るい世の中になっているとは、とても思えない。まだまだ、嵐を必要とする人は多いはずだ。（文化くらし報道部・林るみ）

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.